

2025 年度

国 語
(2 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

清泉女学院中学校

〔一〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。）

「相撲を見たことがありますか？」こう尋ねられたら君は何と答えるだろうか。

「Ⅰ」——熱心だなあ。

「Ⅱ」——そういうことつてよくある。

「Ⅲ」——あ、ここで読むのをやめないで。

まあ、この他にも、様々な答え方があるだろうけれど、「相撲なんて一度も見たことがない」とか、「相撲って、何？」とか答える人は、少なくとも日本の中では、ほとんどいないだろう。

（中略）

あるとき、一緒に見に行った人の言葉で、印象に残った言葉があった。「家のテレビで見ているときには、仕切り直しの時間が長いと感じられるのに、ここに来るとそうでもない。家にいるときには、どんどん取組を進行させればいいのにと思っていたけれど、^①ここでは、もう制限時間いっぱい？ という感じがする」。世の中には、言われる前には考えてもみなかったけれど、言葉にされるとすぐさま納得できることっていうのがあるが、まさしくそんな感じだった。国技館の中では時間の流れ方さえ違ってしまうかのように。

こういうことは、相撲だけではない。野球だってそうだ。ご心配なく。「野球を見たことがありますか？」なんていう問いを繰り返したりしませんから。ともかく、野球、とりわけナイト・ゲームは本当に美しい。芝生の緑が昼間以上に輝いて見え、テレビではオジサンのように見える選手でさえ、実は俊敏な動きをするスポーツマンであるということがよくわかる。好きなチームが優勢ならば、テレビ観戦のとき以上にビールの味は格別だ。^②（値段も格別だけど。）

野球場でも時間の流れが変わるような気がする。ふだんなら、攻守交代やピッチャー交代は、コマーシャルの時間、およびトイレ・タイム。ところがここではアツという間に過ぎていく……。

ただし、よいことばかりとは限らない。相撲でも野球でも、現場で見ているとすごく不便なことが一つある。それは、決定的な場面を「ではスローモーションでもう一度」というわけにはいかないということだ。人生に、あるいは世の中に、厳密な意味でのやり直しなんてありえないのに、

再現画像を何気なく期待してしまっている自分の思考回路に少しとまどってしまう。それほどまでにテレビに飼い慣らされてきたことが滑稽に感じられる。^③

テレビの影響は、他にもある。相撲の場合だと、土俵外のことには気をとられて、つい勝負を見逃してしまうことがあるのだ。国技館にいらして「さあ、制限時間いっぱいです！」というアナウンサーの声が聞こえるはずもないからだ。野球の場合だと、目の前の空間が広すぎて神経を集中しにくいことがある。どこを見ればいいか、わからなくなってしまうのだ。できることなら、テレビ中継の画面のように、視野を限定して拡大して見たくなくなってしまう。こう考えてくると、テレビでのスポーツ観戦の特徴は、臨場感が制限されるということだけではないということがわかる。何らかの脚色^{あしご}が加えられた形で観戦しているのだ。たとえば視線の置き方に関して。

スポーツ中継の場合には、何台ものテレビカメラが持ち込まれて、それらの画像を調整担当者たちが切り替えることによって番組が進行していく。実際に競技の場にいる人には、そんな視線の切り替えは不可能だ。自分の座^{すわ}っている席からの視線に固定されてしまう。そうすると、テレビ中継は、「誰^{だれ}のものでもない視線」をわれわれに提供していることになる。ここではまず「提供」という表現をしたが、場合によっては「視線を強制する」と言ってもいい。テレビは、われわれにどこを見るべきか、どこが見どころなのかをわかりやすく提供するが、同時に、^④そのわかりやすさの陰には視線の強制という行為^{こうゐ}が隠れている。

「視線の強制」という表現に違和感^{ゐかん}を覚える人がいるかもしれない。「強制」という言葉には、何だか無理やり頭を押さえて、あれを見なさい、これを見なさい、と言われているような含みがあるからだ。

B

「視線の誘導^{ゆうどう}」という言い方くらいでいいんじゃないかと思う人もいるだろう。

C

「視線の選択^{せんたく}の自由」がないこと

には何の変わりもない。視線を自分で切り替えることのできない不自由さ、そういう不自由さをはっきり意識するために、「強制」というきつい言葉をあえて使ってみたのだ。考えておきたいのはむしろ、そのような不自由さを視聴者たちに負担させておきながら、ほとんどそれを意識させないような、ソフトな強制の仕方をしているということだ。

D

、言い換えると、根本の所は強制していながら、それをオブラートの中に

E

、せいぜい誘導されているくらいにしか思っていないというのが現実

なのだ。

スポーツ中継の場合で言うと、複数のカメラの画面を切り替えて、どの視線を視聴者に提供するか、判断をして指示を下すのは、ディレクターという立場の人だ。この英語の肩書^{かたが}は、元々は「指図する人、命令する人」という意味。野球や映画なら「監督^{かんとく}」とか「演出家」に相当する。おそらくは、カメラマンをはじめとする現場の人間に対して指示を下すからディレクターという名前になったのだろう。

ところが、よくよく考えてみると、ディレクターが指示を下している相手は、テレビ局の人間だけではない。日本全国でその画面を見ている何百万人という人間に対しても、「あれを見なさい、これを見なさい」という指示を下しているのだ。途中^{とちゅう}に電波という媒介^{ばいかい}があるから、そして、見ている人たちは各家庭に分散してしまっているから、気づきにくいことなのだけれど、誰かによって選ばれた同一の画面を、何百万人という人々が見つめているということは、とてつもないことなのではないだろうか？

この「とてつものなさ」^⑤は、次のような空想をしてみれば、なおさらいっそうわかりやすい。仮に、何百万人も収容できる競技場があるとする。ふだんならテレビを見ている人たちがすべて、そこに集合して競技を見ている。ただし、その巨大な観衆の前に一人の指導者がいる。そして、「あそこを見なさい。ここを見なさい」と大声で叫ぶ^{さけ}。すると、その通りに数百万の人々が首を右へ左へと動かしている……なんともおぞましく、異様な光景ではないだろうか。

ただし、ここで注意。「ディレクターっていうのは、とんでもない人間だな」と考える人がいるとしたら、その人は早とちりと言われても仕方がない。ここでの異様さは、ディレクター個人の人間性とは関係がないのであって、ディレクターは一つの役割存在にすぎないのだから。同様に^⑥、「テレビを見ている無批判な大衆」を批判するのも、ここでは少しピントがずれている。ここでは、倫理的な判断^{りんりてき}をあわてて下すよりも、まず、テレビという仕組みが持っている拘束性^{こうそくせい}にきちんと気づくことが大切だと思われるからだ。なぜなら、同じような拘束性は、ディレクターのような存在がいなくても、そしてまた、同時に多数の観客がいなくても、発見できるからだ。^⑦そういう例の一つとして、旅行がある。

成田空港を昼間出発して、香港^{はこんぐん}方面へ向かう飛行機の右側の席に座っていると、晴れている日には、日本列島の姿が非常によく見える。紀伊半島から、四国の室戸岬^{むろとみさき}、足摺岬^{あしずりみさき}、南九州の輪郭^{りんかく}がはっきり見えると、おもわず歓声^{かんせい}をあげたくなる。一人旅だと声に出すのが少し恥ずかしいので心の中で「おおっ！」と無言の叫びをあげるだけにしておくけれど、旅の仲間がいると「見て見て」——おそらく、どんな人でも、年齢^{ねんれい}や立場とは無関係にはしやぎたくなる。

そんなときに、思わず頭に浮かぶ表現、口に出てくる表現は「地図で見たのと同じだねえ」というものだ。⑧でも、これって少し変なのではないだろうか？ だって、地図がまず最初にあつて、後から日本列島ができたのではなくて、そもそも日本列島が先に存在して、それになぞらえて作られたのが地図のはずなのに。

しかし、飛行機の中からの景色を眺めたときの、ぼく自身の頭の中での自然な表現は、やっぱり「地図で見たのと同じだ」になる。

これと似たようなことは、旅の目的地についたときにも生じる。「あ、これだ。なるほど、ガイドブックに書いてある通りだなあ」というような具合に。まるで、ガイドブックの中に書かれていることを確認することが旅行の目的みたいになることさえあつたりして。

場合によっては、次のように叫ぶ観光客に出くわすこともある。「わあ、きれいな景色だなあ。《名曲アルバム》^{*}みたいだ」——これまた、どこか変。この言い方からすると、きれいな景色の基準は《名曲アルバム》の方で、それを基準にして目の前の景色を批評しているみたいに聞こえるからだ。

こういうことを話題にすると、「現代は疑似体験があふれている時代である。直接自分で体験しないで何もかもわかったつもりになるのは危険である」という声が聞こえてくることがある。だが、もつともらしく聞こえるけれども、こんな声には注意が必要だ。というのも、この意見には、隠れた前提があつて、それは「自分の目で見たり、耳で聞いたりする生の経験こそが本物の体験であり、地図やガイドブックを経由した知識は、疑似体験——本物の体験に似ているけれど、あくまでもその代用物にすぎず、本質的に異なつた経験——でしかない」という前提である。ここには「本物と代用物」という対比を軸にした発想があるのだが、^⑨そういう発想そのものが正しいという保証はどこにもない。

たとえば、ラーメンには様々な種類がある。といっても、ここで考えておきたいのは、ミソ、しょうゆ、トンコツ……ということではない。高級中華料理店・知る人ぞ知る隠れた有名店・普通のラーメン屋などのラーメンや、家庭のコンロの上で作られるラーメン、さらにはカップヌードルなどのことだ。さて、このうちのどれが「本物のラーメン」なのか？ そしてどれかが「本物のラーメン」だとすると、他のラーメンは、その代用品にすぎないということになるのだろうか？

誰かがカップヌードルを食べようとするときに、その人は、じつは「本当のラーメン」を食べたいのだが、事情が許さず、しかたなくカップ

ヌードルをすすっているということなのだろうか？ たしかにそんな気分になることもある。でも、カップヌードルを食べることは「本物のラーメン」を食べることの代用だと言いきっていいのだろうか？ もしそうだとすると、どこかの「本物のラーメン」を食べるとき以外はすべて疑似体験にすぎず、たいていの場合疑似体験で、それこそ「まがいものだらけの世の中」になってしまふ。それで納得できるだろうか？

「究極の○○料理」というものもある。こんな言い方をされてしまふと、今まで自分の知らなかった奥義・神秘が解き明かされていくのではないかと思つて、多少ドキドキしてしまふ。でも、こういう表現の背後には「あなたがたが今まで○○料理だと思つていたのは間違ひです。じつは、私がこれから提示するものが、本物の○○料理なのです」という発想の匂いを感じられる。一歩間違へば、そこでは「本物と代用品」の対比が「真実を知る者と無知な大衆」という対比へと変貌し、きわめて権威主義的な操作が忍び込んでくる危険性さえないとはいえない。

（大島保彦「海図なき時代の航海術をもとめて」より一部改変）

※ 名曲アルバム：NHKで放送されているクラシック音楽番組。クラシック音楽に合わせて、美しい風景の映像が流される。

問一 「Ⅰ」、「Ⅱ」、「Ⅲ」に入る言葉としてもつともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

（ただしそれぞれの記号は一度しか使えません。）

ア テレビがつけっぱなしになっているので、見ているような、見ていないような……

イ 野蛮なので見ませんわ。男の裸の勝負なんてどこがいいのかしら

ウ 場所中は、かかさず見てます

エ 趣味で相撲をやっています

オ 相撲なんて知りません

問二——線①「ここでは、もう制限時間いっぱい？　ていう感じがする」とありますが、なぜそのように感じられるのですか。その理由として

もつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 国技館では、観客が行わなくてはならないことがたくさんあるため、いくら時間があっても足りないから。

イ 相撲を生で見る体験は、テレビよりも見どころがあり、生の体験による興奮から、時間の流れが早く感じられるから。

ウ テレビのコマーシャルがない分、次から次へと相撲の取り組みが行われ、時間が過ぎるのがあつという間に感じられるから。

エ 相撲を行う国技館には、様々な見どころがあり、一日過ごしても飽^あきることは決してないから。

オ 相撲を楽しむにしている人たちにとっては、取り組み前の時間でさえも、とても刺激^{しげき}的な時間であるから。

問三——線②「値段も格別だけど」とありますが、どういうことですか。その説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 球場では特別なビールが提供されるので、その値段はとても高いということ。

イ 球場で飲むビールの味は、普段飲むビールよりもおいしく感じられるということ。

ウ 球場でビールを飲むことは、お金を払う行為までも特別に感じられるということ。

エ 球場で生で野球を見るのは特別な行為で、ビールの値段にも特別感を感じられること。

オ 球場で飲むビールの価格は、通常のビールの価格よりも高いということ。

問四 — 線③「滑稽に感じられる」とありますが、なぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 現実世界に再生映像を求めてしまうくらい、自分の思考回路が無意識のうちにテレビに影響されていることに気付いたから。
イ テレビを見て育ってきた自分は、知らず知らずのうちに、思考回路までテレビに支配されていることに気付いたから。
ウ スポーツを生で見る特別な体験をしているのに、さらに再生映像まで期待してしまう欲深い自分の思考回路に気付いたから。
エ テレビに慣れると、生で観戦したときに、目の前の空間が広すぎてどこを見ればよいのか、わからなくなってしまうから。
オ 再生映像やスローモーションがないために、生でスポーツ観戦をするよりもテレビの方がよいと感じてしまっているから。

問五 — 線④「そのわかりやすさの陰には視線の強制という行為が隠れている」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア テレビでは誰でもスポーツ観戦を楽しむことができるように、スポーツ観戦の方法をとめていねいに説明してくれるということ。
イ 実際のスポーツ競技では、あまりにも見どころが多すぎるために、それほどおもしろくないところは編集でカットされてしまうというところ。
ウ 視聴率を上げるために、テレビでは試合を単純にわかりやすく編集し、誰にでも楽しめるような番組に仕上っているということ。
エ 私たちが見ているスポーツ中継は、あくまでもテレビマンが見るべきであると判断した試合の一部分を見せられているにすぎないということ。

オ テレビは試合の見どころを、視点の違ういろいろな映像で編集しているため、現実の試合とは異なった印象になっているということ。

問六

A

E

 に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし

それぞれの記号は一度しか使えません。)

ア あるいは イ たしかに ウ しかし エ むしろ オ つまり カ ところで

問七 —線⑤「とてつみなさ」とありますが、どうしてそのように言っているのですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中か

ら選び、記号で答えなさい。

ア 同じ空間にすることができない多くの人々が、テレビの画面を通して、一つの番組を同時に共有しているから。

イ テレビでは、国境や人種、文化の違いを越えて、世界のいたる場所へ、同じ情報を瞬時に発信できるから。

ウ 世界中の人々が、国境を越えて、多くの情報を相互に発信し続けて、世の中は成り立っているから。

エ 自分の発信したい情報を世界中の人々に発信できてしまうくらい、テレビのディレクターの権限が大きいから。

オ テレビを使うことで、世界中の人々に対して、同じ指示を瞬時に下し、従わせることができるから。

問八 —線⑥「テレビを見ている無批判な大衆」とありますが、それはどういう人々のことを言っていますか。その説明としてもっともふさ

わしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が好まない番組でも、文句を言わずに見る視聴者。

イ 誰かの意図した編集を、無条件に受け入れる視聴者。

ウ テレビに映っているものをまったく疑わない視聴者。

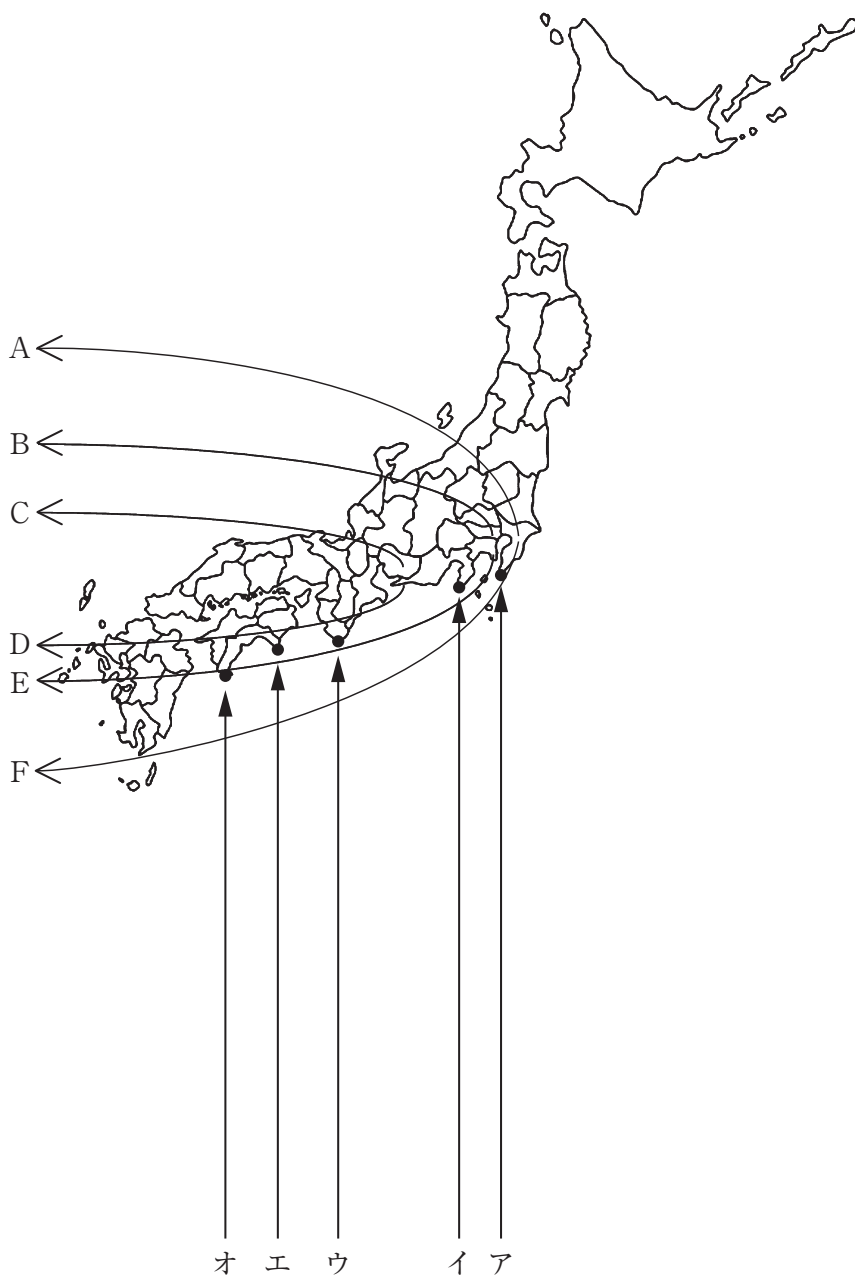
エ テレビディレクターを信頼しきってしまう視聴者。

オ テレビに対して反論する方法を知らない視聴者。

問九 — 線⑦「そういう例の一つとして、旅行がある」とありますが、筆者はこのあと飛行機の中から日本列島を眺めていることがわかります。

- (1) 筆者の乗っている飛行機はどのようなルートで飛んでいますか。もっともふさわしいものをA～Fから選び、記号で答えなさい。
- (2) 次の①、②の場所は左の地図中のどの場所ですか。ふさわしいものをA～Fから選び、記号で答えなさい。

① 室戸岬 ② 足摺岬



問十——線⑧「でも、これって少し変なのではないだろうか？」とありますが、なぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 空から日本列島を見れば様々な感想が出てくるはずなのに、地図と同じであることばかり、気になってしまうから。
イ 実際に飛行機で見た景色から地図を作っているの、目の前の日本列島が地図と同じなのは当然であるから。
ウ 日本列島の実際の様子と地図で描^{えが}かれた日本列島とは、わずかな差があるにもかかわらず、同じものであると考えているから。
エ 実際の日本列島を基に地図を作っているにもかかわらず、地図の方を基準にして、同じであることを確認しているから。
オ 空から見ただけでは日本列島の全体像などわかるはずもないのに、地図で見たときのように何でもわかるような気がしてしまうから。

問十一——線⑨「そういう発想」とありますが、どういう発想ですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 疑似体験はあくまで疑似に過ぎず、直接体験をしないで何もかもわかった気になるのは危険だという発想。
イ 直接の体験をせずともいろいろなことがわかるので、様々な疑似体験を積極的に行うべきだという発想。
ウ 疑似体験は我々の都合によって作られているので、実際の体験をせずにわかった気になるのは問題だという発想。
エ 科学技術の発達により、本物の体験と疑似体験の差はほとんどなくなってきたという発想。
オ 疑似体験はあくまでも本物の代用品に過ぎず、本物の体験に勝^{まさ}ることはできないのだという発想。

問十二——線⑩「きわめて権威主義的な操作が忍び込んでくる危険性さえないとはいえない」とありますが、どういふことですか。その説明としてもつともふさわしいものを後から選び、記号で答えなさい。

ア「究極の○○料理」などのような一部のものを「本物」と認め、それ以外のものは「偽物」であると定義することで、「本物」の価値を必要以上に高め、権威付けする危険性が生じてしまうかもしれないということ。

イ「無知な大衆」は「本物」の存在を知ることができず、その結果、彼らの行動はすべて「代用」であるといふ言えないため、「真実を知る者」のみが価値があり、「無知な大衆」はその存在までも否定されてしまうということ。

ウ「真実を知る者」が認めるもののみが「本物」であり、それ以外のものは「代用品」であるとする考え方は、「真実を知る者」の権威を高め、知らず知らずのうちに「無知な大衆」と優劣をつける上下関係を生む危険性をはらんでいるということ。

エ「真実を知る者」が認めない「代用品」は、その存在価値を完全に否定されてしまったため、「無知な大衆」は「代用品」を「本物」と認めてもらうために、いつも「真実を知る者」に従っていかねばならないということ。

オ「無知な大衆」に対して、常に「本物」の存在を提示できる「真実を知る者」は社会にとって権威的な存在であるため、どのような社会においても絶対的な支配者になってしまう危険性を含んでいるということ。

問十三 次の説明の中で、本文の内容にあっているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア テレビ観戦は無意識のうちにテレビディレクターに編集されたものを見ることになるので、スポーツは生で観戦すべきだ。
イ テレビを見ている人に、「視線の強制」や「視線の誘導」を気付かれないようにすることが番組制作では重要だ。

ウ 《名曲アルバム》で流れる映像を基準に、実際の美しい風景を批評してしまう観光客が存在する。

エ カップヌードルを食べることは「本物のラーメン」を食べているとは言えず、あくまでも疑似体験としか言いようがない。
オ 「究極の○○料理」と呼ばれる料理は、今まで自分の知らなかった奥義・神秘を教えてくれるので、重んじるべきである。

〔二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

みずほは、おじいちゃん・おばあちゃん・両親・兄の義人^{よしと}の家族六人で暮らしている。ある時、大好きなおじいちゃんのガン再発の事実を知り、みずほはショックを受ける。積極的な治療^{ちきゅう}を受けて一日でも長生きしてほしいというのがおばあちゃんの願いだが、おじいちゃんは聞き入れない。おじいちゃんはいつも通りの生活を続け、ある日、みずほとドライブに行くことになった。

おじいちゃんはみずほをドライブにつれていってくれた。これまでも花の苗や種、球根などを買いに園芸店に行くときはみずほをさそってくれていた。その店は遠くだったし、ふたりきりなのでよく話せた。

おじいちゃんは前を見ながらハンドルをにぎっていて、みずほも前を見つづけて話したので、家で話すよりいい^①にいいこともいえた。

このところおじいちゃんの病気についての情報は、みずほの耳には入ってこない。心配するほどのことではなかったのでは、と思うことがある。でもはつきりとおじいちゃんの口から聞きたかった。

「知ってるんやけど、わたし。……おじいちゃんの病気のこと」

みずほはちよつと口ごもりながらたずねた。

「再発したって……ほんと？」

ちらつとおじいちゃんを見た。おじいちゃんは下くちびるをつきだし、うむ、とつぶやき、小さくうなずいた。

「そんな！　じゃ、なんで治療をしないと決めたん？」

おじいちゃんはすぐには口をひらかなかった。

「だって、わたし、二年生のとき腕^{うで}を骨折したけど、ちゃんと医者さんが治してくれはったやん。おばあちゃんだって目の手術して、よく見えるようになったやん。なんでおじいちゃんは治療しないのよ」

一気に入った。いいながらだんだん腹が立ち、早口になった。

「おじいちゃん、治療しないんはまちがってると思うよ」

みずほは A して胸が苦しいようで、シートベルトを手でゆるめるように引っぱった。おじいちゃんは窓をすこしあけた。

「そうか、知ってたんか。かくす気はないんやけどな、まあ、はやくから心配させてもな」

ちよつと小首をかしげ、苦わらいした。

「心配するよ。あたりまえやわ、お兄ちゃんもみんな心配してる。みんなおじいちゃんに長生きしてほしいから」

怒りか心配か自分でもわからない。涙がこみあげてくる。それでもおじいちゃんは、なだめるようにしずかにつづけた。

「おおきに。でもな、今のおじいちゃんには、病院のベッドで過ごすのは、もったいない時間の過ごしカタやねん。お医者さんもおじいちゃんの年齢になったら抗がん剤などの治療はすめられない、っていうてはる。おじいちゃんはその先生を信頼した」

深刻な声でも無念そうな声でもない、いつものやわらかいものいいだった。それがまたみずほはもどかしく、さらにふみこんだ。

「でも治療しないと、どんどん、わるくなるんちがうの？」

「いやいや、そうともかぎらん。治療することで副作用がひどく出て、今まであたりまえにできたこともできんようになる場合もある。おじいちゃんはやな、死んだらおしまいとは思ってない。生きることのつづきに死があると思うから、今のくらしを大切に、ふつうにつづけていたいだけや」

「どんな？」

「朝おきて、二階でみずほたちの足音がしているのを聞くやろ。あ、上の四人は元気で、仕事やら学校に行くんやなあ、って思うとうれしいで。それから身じたくして、おばあちゃんの作ってくれる朝ごはんをおいしいなあというて食べるやろ。いっしょにあとかたづけしたり、庭の花の手入れしたりする生活が好きやねん。それがうれしい」

「好き？ うれしい？ 毎日でも？」

「ああ、草花に日がちゃんとあたるようにまわりを手入れして、水やったり、ときには肥料や消毒もしてやるねん」

それはみずほも見ているから知っていた。でもそれが、すごくうれしいというほどだとは思わなかった。

「それにな、『せいいっぱい咲くんやで』って声かけてやるんや」

「花に？」

「そうや、話しかけるんが大事や。そうするとちゃんと咲いてくれるから、『おおきに、みごとな咲きっぷりやで。みんなを楽しませてくれて、ありがと』っていうねん。それはみずほのひいおばあちゃんの口ぐせやつてんけど、知らんまにほくもいうようになってたな。それから、花が終わったら、お礼肥れいこえするやろ。あれは咲いてくれてありがとう、おつかれさん、ゆっくり休んで、また来年も咲いてな、というお礼とお願いのごちそうや。咲いたあとは地面の下で球根を太らせたり根を広げたり、種を飛ばしたりして子孫を残していく。花の世話するものはな、花を見ることができると保証されたわけやない。それでも元気な花が咲くように、そのときどきのしないといけないことするのが、大事な仕事や」

おじいちゃんのいわんとすることはわからなくはないけれど、どこかそのさきを聞きたくない気持ちがあつて、みずほは **B** したままだった。「人間もな、自分の持ち時間をていねいに生きることが大切やと思う。まわりの人といっしょにな。そうすると、自分がいなくなっても、その人たちの心の中に、いっしょに過ごした思い出が残るやろ。おじいちゃんもな、いろんな人が心の中でいっしょに生きているように思うんや。おじいちゃんの親もずいぶん前に死んだんやけど、おじいちゃんの心の中でいっしょに生きつづけている。だからおじいちゃんも、みずほたちの心の中で生きていたいな」

「いやっ！ おじいちゃんがいなくなるのはいやや」

みずほは泣きそうになった。

「ごめんごめん、みずほには刺激しげきが強すぎたな。でもな、生まれたら、かならず死ぬ、これは動かしようがない。それはわかるな」
うん、とみずほは力なくうなずいた。でも考えたくない。

(中略)

「生きるの、いやなん？」

「そーんな、あほな」

おじいちゃんはわらった。《ア》

「生きるの、楽しいで。朝目がさめたら、おー、きょうはなにが待ってるかな、どんなことがあるかな、って思う。どんな人に会うかなと思うと、無精ぶせうひげなんかはやしてられん。朝、顔あらって、ひげそりして、髪かみにくしを入れたら、

C

してな、わくわくする」

そんなあたりまえのこと、なにが楽しいんだらう。みずほはおじいちゃんを遠く感じた。《イ》二度ともどってこられない。話すこともふ

れることもできなくなってしまう。

「あのな」

おじいちゃんがしずかな声でいった。みずほは顔をあげた。走りぬける道路わきの柿畑は、赤い実がめだちはじめていた。^⑤ かきばな

「ほら、あそこの柿の木、この間まで青かったのに、時季が来て赤くなってる。じきに熟すやろ。そしたら、ぽとりと落ちる。だけどな、それで終わりやないやろ。種が土に落ちて、芽を出し、大きくなる。柿の実は落ちることできの命につなげているんやなあ」

おじいちゃんは、ひとりごとをつぶやくように話す。

「生きることを投げだしたり、あきらめたりするつもりはないねん。時間やなくて中身や。自分らしい生きかたして、柿の実がぽとりと落ちるように、自然にまかせて終わりたいんや」

おじいちゃんはいいながらうなずいていた。

「『たとえあした、世界が滅亡^{めつぼう}しようともきょうわたしはりんごの木を植える』ってことば、聞いたことないか？」

「聞いたことない」

そくぎに答えた。おじいちゃんは、「そうか、まだ小学生やもんなあ」といつてくすつとわらった。《ウ》みずほはむっとした。

「あした世界がなくなるとわかつてるのに、そんなむだなこと、なんでするの」

「そう思う？ たしかにな、おじいちゃんもはじめてこのことばを知ったときには、そう思ったなあ。だけどな、そのうち考えるようになったんや。人はみんなかならず死ぬやろ。それやったら死ぬために生きるんなら、なんで生きなあかのやろか、とな。死んだらそれで終わりやったら、生きるのは無意味や」

うーん、たしかにそうともいえるけど、でも……、とみずほはどこか納得できなかった。《エ》

「りんごの木を植えるのは未来への希望やろな。りんごが実のを見ることはだけへんでも、新しいりんごの木を植えることが自分の役目だとしたら、それを淡々^{たんたん}とすることやろな、と思うんや。希望をなくしたら、人間、生きるのが苦しいと思うで」

希望！ みずほはそんなことを、まじめに考えたことはなかった。《オ》

「おじいちゃん、りんごの木、つてなに？」

「そやな、いろいろあるな。花を植えることも、そうやし。それになにより、みずほや義人も、みずほのお父さんとお母さんも、おじいちゃんの新しいりんごの木やで」

みずほはちよつとどきんとした。うれしいような、てれくさい気持ちだ。

「きょうすることを、こつこつやるのが、おじいちゃんの仕事や。そして、そのささやかな仕事ができる毎日を、感謝してよろこんで生きたいんや」

「だけど、命がなくなったら、終わりじゃん」

ぶっきらぼうにはねかえす。でもおじいちゃんはずづけた。

「そうやろか。命が終わっても、それで全部終わりやないと思うで。じっさい、おじいちゃんせんばいは両親や、兄弟、お世話になった先生や先輩たちからいろんなこと教えてもらったりしてきて、その人たちが今のおじいちゃんを作っているねん。それを最近しみじみ感じるんや。そやから、おじいちゃんせんばいは死んでも生きつづけると思えるんや。ほら、おじいちゃんにはみずほがいてる、義人がいてる。な、つながる何人かに命は受けつがれているやろ。希望や！ おじいちゃんには希望があるねん。ふたりはこれからどんな人生をおくっていくやろ、と考えるだけで楽しくなるんや」
わかったような、わからない話だ。^⑥ どう反論したらいいのか、だまりこくっているうちに、車は園芸店に着いた。

（大谷美和子『りんごの木を植えて』より一部改変）

問一 ― 線①「家で話すよりいいにくいこともいえた」とありますが、「いいにくいこと」とはどのようなことですか。次の中からその説明としてもつともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 心配するほどのことではなかったのに、おじいちゃんがガンの再発について大げさに言っていることへの不満。

イ おばあちゃんも自分と同じく積極的な治療を願っているのに、おじいちゃんに無視されていることへの同情。

ウ おじいちゃんがガンの再発のことをかくして、家族に少しも教えてくれようとしなことへのいらだち。

エ みんなが積極的なガンの治療を願っているのに、それをおじいちゃんにすすめようとしないう医者への疑問。

オ おじいちゃんのガンが再発したことや、積極的な治療を受け入れないと自分で決めているらしいことへの不安。

問二 A C に入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア どぎまぎ イ きつぱりと ウ しゃきつと エ むつつりと オ はらはら カ いらいら

問三 — 線②「小首をかしげ」について次の問いに答えなさい。

(1) 「小首をかしげ」とはどのような動作ですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭を左右に動かし驚く。

イ 首をかたむけて考えこむ。

ウ あごを引いて身構える。

エ 頭を下げて謝る。

オ 顔をそむけて照れる。

(2) 次の文は、「小首をかしげ」るのように「小」という言いまわしの表現をふくんでいます。それぞれの文の に指定された字数の漢字を入れて、文を完成させなさい。

a 人のうわさを小 にはさむ。(一字)

b 小 を並べられてうんざりする。(一字)

c 小 をしてもすぐにばれる。(二字)

d 小 よいリズム。(二字)

問四 — 線③「花の世話するものはなくしないといけないこととする」とありますが、これを — 線③より後で、植物を使って表現している一文があります。その一文をぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問五 — 線④「そのさきを聞きたくない気持ちがあって」とありますが、みずほは、この後おじいちゃんの口からどのような話が出てくると感じていたのですか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 花が子孫を残して人を楽しませていく話。

イ みずほがしなければいけない仕事の話。

ウ おじいちゃんが死んでしまった後の話。

エ みずほのひいおばあちゃんが死んでしまった時の話。

オ おじいちゃんの次はおばあちゃんが死んでしまうだろうという話。

問六 次の文章が入る所としてもっともふさわしいのは、文中の《ア》《オ》のどこですか。記号で答えなさい。

おじいちゃんは死ぬのかもしれない。たったひとりで、みずほたちの前からいなくなってしまう。

問七 — 線⑤「柿畑^{かきばたけ}は、赤い実がめだちはじめていた」とありますが、この後の柿の実のエピソードから、おじいちゃんはどういうような生き方をしたいと考えていることがわかりますか。五十字以内で答えなさい。

問八 — 線⑥「どう反論したらいいのか、だまりこくっているうちに、車は園芸店に着いた」とありますが、みずほがおじいちゃんの話に納得できず、反論したいと思っているのは、みずほとおじいちゃん、「死」のとらえ方が異なるからだと考えられます。それぞれ「死」をどのように考えているのですか。六十字以上七十字以内で答えなさい。

問九 — 線「『たとえあした、世界が滅亡^{めつぼう}しようともきょうわたしはりんごの木を植える』とありますが、おじいちゃんはこの言葉にどのようなメッセージがふくまれていると考えているのでしょうか。六十字程度で答えなさい。

〔三〕

次の(1)、(2)にそれぞれ答えなさい。

(1) 日本の風習では、その時々に合わせて食べるものが数多く存在します。次の日付にはどのようなものを食べるのが一般的でしょうか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

① 一月七日

② 三月三日

③ 五月五日

④ 九月二十三日頃(ころ)(秋分)

⑤ 十二月二十二日頃(ころ)(冬至)

⑥ 十二月三十一日

ア そば イ うなぎ ウ はまぐりのお吸い物 エ 柏餅(かしもち) オ おはぎ カ 七草がゆ キ かぼちゃ

(2) 次の――線について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

① 国語ジテンを使う。

② カッキテキな発明だ。

③ 彼の業績をレッキヨする。

④ シッソな生活を送る。

⑤ クラスのレンタイカンを高める。

⑥ 分別のある行動をとる。

⑦ 見聞を広める。

⑧ 湯治場へ行く。